

# 高度経済成長期農村におけるサークル活動と女性

—家庭・地域の変革と子ども達—

増 田 仁

## Group activities by women in rural regions during the high growth period in Japan:

Children as change subjects in home and region

Megumi Masuda

(Received September 30, 2019)

This paper focus on group activities by women at rural region in Shimane prefecture during the high growth period in Japan. Some women song with her child and physical exercises regularly. These practice changed their region's customs. And women could go out alone. Through group activities, women enlightened others by humor and knowledge.

**Key words :** group activities, rural women

### 1. 問題の所在

本研究の目的は、高度経済成長期における農村女性の視点から、彼女たちがどのように封建的な家や地域と向き合い、変えようとしていったのかをサークル活動を事例として取り上げながら分析することである。女性たちがサークルに参加するにも家庭の理解が必要ななかで、どのような手立てを講じながら参加を継続していったのか、家庭内の人間関係にも着目する。

農村女性たちは、家事労働と生産労働に追われ、ラジオを聴く時間もない、家計等家の主導権を握れない、新聞を読めば「遊んでいる」といわれ、外出も困難であった。家と労働に縛り付けられながらも家を変え、地域を変えようとしてきた女性たちの生活実践を分析する。本研究が着目するのは、農村における文化活動の役割である。

タブーだらけの当時の農村における女性たちのラディカルな活動が歌うことであり、言うこと、書くこと、そして集うことであった。歌うことはタブーであり、言うことさらに書くことや集うことはもっとタブーとみなされていた。当該期の農村には、生活を楽しむことのタブーや現状を変えることのタブーが存在していた。

出産が当然視されていた当該期の農村女性は、子どもとの関わりが深かった。当該期には家族の無理解や経済的理由から墮胎も多く行われ、水子という子どもになれなかった「子ども」も農村女性にとって身近な存在であった。女性たちは子どもを言い訳に集い、社会を変えるという「子ども」という戦略が存在した。また、子どもも母親を支える役割を果たしていた。

農村という他者の監視が常に存在する空間においても「自由な女」あるいは「自由になろうとする女」たちがいた。制約の中にあっても、ものを言い、書き、歌い、学び、集う彼女たちは批判の対象とはなっても、研究の対象となることは少なかった。一方、他者の無関心に守られた都会の「自由な女」(職業婦人・モダンガール)は、自由になるカネを持ち独身でも許され、批判されることもあったが一方で憧れの対象でもあり、研究の対象としても取り上げられてきた。

農村の「自由な女」を一方で縛りつつも解放の可能性という側面ももつ両義的な存在が子どもであった。子どもが歌うのは許されるが女が歌うのは許されない状況の中で、子どもと歌えば許されたのであった。そこからうまれるのが「母」という戦略であった。「女」では許されないことも「母」ならば許されるのである。「女」たち

が集うのは危険視されるが子どもと集えば見逃される。ここから、農村において子どもを巻き込みながら、地域を巻き込み、時には変革さえもしていく諸実践を分析していく。

本研究は、農家女性たちのサークル活動に着目しながら、農村の封建性を変えるための具体的な行為とその内実を掘り下げていく。農村という空間と対峙しながら、彼女たちが家や地域をどのような方策で変えようとしていったのか。目に見えず、文書にも残されないが農村を変える力になる実践（セルトー 1980=1987）つまりは空気を変えていく諸実践を実証・分析する。（セルトー 1980=1987）が指摘する「なんとかやっていくこと」に含まれる、農村の封建性を変えるための具体的な行動とその内実である、農村女性たちの「戦略なき戦略」を見ていく。天野（1996）は、「生活者」の系譜を紐解きながら、戦中・戦後から現代まで、知識人や一般人が「生活」をどのように定義し、実践してきたのかを分析している。本研究は、高度経済成長期の農村女性たちが「生活者」として何を考え、どのような実践を繰り返したのかを具体的な資料から分析していく。

戦後日本の農村で展開されたサークル活動が、家庭や職場（家事労働現場・賃労働現場・家内生産労働現場）といった女性たちの労働現場と齟齬をきたす可能性を内包しながらも、どのように「労働」現場の改善をもたらしていったのかを実証する。戦後日本の封建的な色彩の強い農村で、女性たちが集って読み・書き・話し、水平的な人間関係を構築したことの影響力を分析する。戦間期から高度経済成長期において、高い学歴を身につけられなかった女性たちに力をもたらす、ネットワークをもたらすものとして、ジェンダーの視点から広い意味での生涯学習をとらえ返す。「生涯学習」という言葉もない時代に、自主的なサークル活動が特に生きる支えになっていた時代における上からの啓蒙ではない社会教育の可能性を問う。

本研究は、高齢化・過疎化の進行する現代農村社会での教育/生活/労働の在り方への示唆につながる。高度経済成長期に作られた社会システムの見直しが行われつつある現在、システム構築前後の人々の生活実践を掘り起こすことで、今後の社会システムのあり方が展望されよう。家庭の空洞化と行政化が進む現代の日本社会においてその始まりの時代の女性と子どもたちの生活の在り様を分析する。

取り上げるデータは溝上泰子の著作『日本の底辺』（1958年刊行）と『生活者の思想』（1961年刊行）である。1951年4月に島根大学に「家政原理」の担当者として赴任した溝上は、この地で講演会や文通を通して関わった人々の手記から構成されている（鬼嶋 2014 p.33）。

溝上の経歴は以下のとおりである。1923年奈良女子高等師範学校家事科入学。卒業後は附属小学校で教員となり、家事科の教育・研究を行う。従来の家事教育を批判し、女性の雑務からの解放を述べる（鬼嶋 2014 p.23）。1934年東京文理科大学入学（31歳）、教育学専攻、哲学・宗教学への強い関心をもつ。1945年『国家的母性の構造』を出版した。「母性」と「父性」の二元論が根底にある。

溝上の基本的な思想は以下の文章から読み取れよう。

人間についての考えは哲学者だけのものようである。しかも今日は、その哲学が世界から見すてられているような気がする。まして、くらしのなかで考えるというようなど、だれも問題にしていないようである。…マス・プロ時代にもとめられるものは個性であろう。個性はごまかしのきかない生き方によって以外、生きてこないと信じる。（溝上 1986 p.153）（下線は増田）

溝上が強く影響を受けた母親について以下のように書かれている。

「中産の農家の生まれ…母はほとんど字は書けなかったが、68から手習いをした人である。」（溝上 1986 p.171）

「学校で勉強する勉強は母には縁がなかったが、身についた教養というものであろうか、ただの農家の主婦にはないものを母はもっていた。」（溝上 1986 p.171）

「父の進歩性と母のそれにはちがいがあった。母のそれには、自分が勉強できなかった悲しさへの復讐のようなものさえ感じられた。」（溝上 1986 pp.172-173）（下線は増田）

学歴がない者のもつ教養や品位というものを溝上は感じ取っていた。

## 2. 高度経済成長期島根県における農家女性の生活状況

## 2-1. 島根県の生活実態

下の表1は昭和26年、31年、35年の所得水準の推移を全国平均を100とした場合の東京と島根を比較したものである。東京をはじめ太平洋側で開発が進みつつある中、日本海側は工業化の後れを取ったことが所得に反映されていると考えられる。

表1：所得水準の推移

	昭和26年	昭和31年	昭和35年
全国	100	100	100
東京	150.2	187.5 (1)	184.3 (1)
島根	67.4	77.7 (37)	72.2 (39)

( ) 内は全国順位  
(内藤 1982 p.317)

また下の表2は、昭和25年、30年、35年の産業別構成者の推移を島根と全国平均を載せたものである。島根では昭和35年になっても第一次産業従事者が5割を超えており、第二次産業従事者は全国平均の半分程度である。つまり高度経済成長期において農業等の第一次産業従事者が多かった島根県は、農村の論理（封建制等）が他地域より長く続き、その変容が緩やかであったといえる。この地域の女性たちの生活に焦点をあてることは、第一次産業に従事し続けながらどのように暮らしを変えようとしていったのかを分析する上で適している。

表2：産業別就業者構成の推移

	第一次		第二次		第三次	
	島根	全国	島根	全国	島根	全国
昭和25年	66	48.3	12.6	21.4	21.3	30.2
昭和30年	58.3	41.1	15	23.8	26.7	35.1
昭和35年	53.1	32.8	15.4	29.2	31.5	38

(内藤 1982 p.317)

最後に表3の昭和34年における生活水準の地域差指数を見てみよう。どの項目においても島根県は全国平均の50%から60%台とかなり低く、農村生活を変容させる志向性や家事労働を効率化させられておらず、レジャー等によって息抜きを行うことも一般的ではないことがわかる。このような過酷な農村生活において女性たちはどのような試行錯誤を試みていったのか、溝上の著作から分析していきたい。

表3：生活水準の地域差指数（昭和34年）

	全国	島根
農村生活革新指数	100	58.5
家事労働合理化指数	100	67.1
洋風化指数	100	51.2
レジャー指数	100	57

(内藤 1982 p.317)

## 2-2. 農家女性たちの生産労働と再生産労働の二重負担——墮胎・多産・離縁——

農村では墮胎が多く行われていた。

『里行』といって、多い人は年に二回も中絶する人がいるそうです。その『里行』も、四、五日で帰り、何くわぬ顔で、仕事を続けなければなりません。最近、神経衰弱、精神異常の婦人が多くなったのは、このためではないかと推察されます。結婚して、三つの坊やの母である友達は、『姑、家のものへの気づかひも、大へんだけど、あの事が何よりも気苦労だ』と、そっと耳うちしてくれました。世間態を恥じ、家族に気を使い、無理解な夫に、苛まれる妊婦も数多い事でしょう」(溝上 1958 pp.32-33) (下線は増田)

生産労働と再生産労働を両立させることの困難の結果が墮胎であり、そのことを口にできず、女性にとって心身ともに大きな負担であった。また次にみられるように、農作業をしながら毎年のように出産する女性や何年たっても子どもができない女性は離婚させられるなど、再生産労働をめぐって女性たちは疲弊していた。

「受胎調節もなかった昔は、ほとんどの人が一年おきに子どもを産んでいました。ですから十人くらいの子もちは普通で、私の実母は十一人。姑は九人もの子どもを産んでいます。私の近所には一月に出産して同じ年の十二月に二人目、あくる年に三人目、その翌年に四人目と三年間に四人の子どもを産んでいる人がいます。/ こんなに多くの子どもを産む人がある反面「産まずは去る」とか「子はかすがい」とかの言葉どおり、四、五年もたって子どもを産めない人は、当然のこととして離縁され、里がえりをして長く泊っている女の人を「あの人にはうまずめだけな」ときいたことがあります。/…女の子が生まれると「よもぎつみが生まれた」といい、男の子が生まれると産婦は鼻が高かったようで、もう生まれ落ちた時点から女の存在はわびしいものであったようです。」(島根県連合婦人会 1983 pp.108-109) (/は改行)

避妊への夫の協力が得られず出産や墮胎を繰り返し、逆に子どもが出来なければ離婚され、生産労働同様、あるいはそれ以上に自らの体を酷使する再生産労働は女性たちに重くのしかかっていた。生まれてきた子どもの性別も重要であり、女の子は初めから「手間」として見られていた。

「私も嫁入りをして、近所への初歩きのとき姑が「手間をもらいましたのでよろしくお願ひします」とあいさつしていたことを思い出します。このようなあいさつ言葉は現在も使われており、時々、耳にすることがあります。」(島根県連合婦人会 1983 p.108)

「農村では「手間」といわれる嫁が、たとえ二時間でも家をあけることは、それだけ仕事の能率が下ることである。事実そうでない場合でも、嫁を外へ出したがらないのが、農村のしきたりである。」(溝上 1958 p.101)

田中民子 四人家族

「合理的な思い通りな台所やなんか、今の私達には夢のような気がします。でも少しでもそれに近いようにしようと努力したいと思います」(溝上 1958 p.79)

「…いくら経済的に恵まれていても、家長意識が支配しているくらしもある。これをくずす力は頭脳である。このような頭脳的な力を養ってゆくこと、その角度からの啓蒙は戦後めざましくなされてきた。そして、その対象は「女・子供」といわれて「家長」や「戸主」の支配のもとで、半人前と見られ、まもられ、酷使されていた人びとであった。」(溝上 1986 pp.48-49) (下線は増田)

学校教育と社会教育の対象は「女・子供」であり、既得権をもった「家長」「戸主」を変えることは困難と考えられていた。虐げられた者たちへの教育が戦後の学校教育と社会教育の原点だったのである。

### 3. 農村を変える女性たちと子どもたち——家庭を変える——

橋本庄子 33歳 七人家族

「…私は非常に『うた』がすきで、なにをするときも、フンツラフンツラうたっています。心につまらないときや、ヒステリー？がおきた時など、朗らかなうたを、小さい声でうたいますと、いつの間にか忘れてしまいます。昔の人はやれ流し場(炊事場)でうたうな、くど場でうたうなと申されますが、私は作業中でも適当なとき

にすきなうたをうたいます。/子供も『お母さん、うたうたおうや』と、藁仕事の側へきます。新しいうたを教えたり、教えられたりします。自然、ラジオもみんなできき、一緒にうたいます。…私の家は私がこんなですから仕方なく？みんなうたが好きですが、近所の老人のいらっしゃる家など嫁がラジオについてうたった、とすぐお茶のみの話になりますから。…もっともみんなうたう気持ちになれたら、生活が楽しくなりましょうに。/この寒い冬の間は近所のおちど、悪口などほじくり出して、お茶のお菓子にする時期です。特に女はそうです。」(溝上 1958 p.98) (/は改行) (下線は増田)

子どもと歌うことで子どもの文化と大人の文化が混じり合う契機となっていく。歌には音程やリズムによる気分の高揚・歌詞の解釈の多様性があり、娯楽の少ない農村生活においてストレスの発散にもなった。しかし、前例のない行為をする女の足を引っ張る女たちが存在した。

「…子供の母として時代におくれまいと、懸命に頑張っている。この頃、農繁期ですので、朝六時におきて朝食の準備を致します。ラジオのスイッチはおきがけにいますので、御飯がフツフツ煮える頃、ラジオ体操です。この頃、子供がおきます。はじめは“お母さんがラジオ体操しちよらいよ”と姑達につげ口されるのがはずかしくて、子供のおきない時ばかりやって居りましたが、この四、五日思い切って子供の前でやります。かまどの横の土間で、袖無をぬいで思い切りやります。子供は初めの日、眼をまん丸くしてじっとみつめて居りましたが、今朝など、男の子は“母ちゃん、また、ラジオ体操しーかね、なしてね”と聞きます。私は“体が元気になって病気をしないから”と答えます。寒い朝でも体がほかほかします。雑巾がけもみんな終って、御飯もたべられる様にしてから、みんなをおこします。…」(1958年12月27日 31歳の嫁)

家庭、とくに農家に時間的動作をとりいれること、しかも日頃のせいにかつになかった体操をすることは大仕事である。誰でも、親しい家族や仲間の前で、きわだったことをすると、面はゆいものである。それを思いきって子供の目の前でする気になるまでには、かなりの抵抗があったであろう。それを破ったことは、一種の精神的な脱皮である。そこに、この母親の生きることへの意欲がある。これがある限り、この嫁は決して「手間」ではないし、この意欲は、この押しつぶされそうな家庭の雰囲気やだんだんかえるであろう。たとえそれが牛の歩みであっても、一人一人の日ごろのくらしのなかの生き方が、積みかさなって力になる。これは偉大なことである。(溝上 1986 pp.50-51) (下線は増田)

時間という観念がなかった農村に時間を導入すること(時間通りに行為すること)により、生活の「合理化」を結果的に推し進めていったのである。

#### 婚約中の女性

「今までの多くの結婚した人たちが妻に名前があるのに“コラァ”と呼ぶのです。人間にはだれにも名前があるのに、自分の妻の名前を呼ばないところに、家庭のまがりがあります。」(溝上 1986 p.58)

若者たちは、農村の内外意識を変えていく力を持っている。身内であっても礼儀と距離を保つことの重要性をこの若者は指摘している。

#### ある 24 歳の青年

「…僕もいろんな夢をもって居りますが、どれもこれも仲々難物です。…僕の近所でもやっぱり夫婦仲が睦まじいとうるさいですね。かと云って悪かったら一層いけません。つまり仲が良ければ良いで、悪ければ悪いで騒ぎます。…僕が結婚してからも出る時はいつも妻と一緒にしたいと、今から楽しみにしています。又、仲が良いなどと云ってうるさくいう人が居たら、尚一層、仲の良いところを見せつけてやりたいと思っています。仲の良いのは当たり前だという考え方になってもらうために。」(溝上 1986 pp.58-59) (下線は増田)

他人の家庭に深入りしがちな世間とどのように折り合いをつけていくのが若者たちの課題であった。

#### 息子の言葉

「きびしさのかたまりのような母が、おっかない時のあるにはあったが、私は母が好きで好きでたまらなかった。

母と私の間を結んでいたものは母のそうした人生に対する敬虔な態度ではなかったろうか。…親が意識的につくった教育環境もむしろ大切な意味を持つけれども、その底により決定的な意味を持つものは、家庭の親の生活態度であること——このように思う。」(溝上 1986 pp.176-177) (下線は増田)

息子に映じた母—母子の葛藤—

「一番いとおしい母の生きている場が、一番心の重荷になる。  
私は母の血を吸い吸い母にそむきそむき人間の自由をもとめた。  
私は誰の子でもなく、母の子である。と同時にその母にも譲ろうとして、譲り得ない個の世界がある。」(溝上 1986 pp.181)

子どもの自由と束縛する母親との関係。自分の全てであった子どもはいつか自立し、他者となっていく。母親への愛と憎しみ。

#### 4. 世間との葛藤の中から生まれるサークル活動の可能性—地域を変える—

津村かよ 62歳

「いろいろな悩みがあり、悲しみもあり、うるさいうるさいこともたくさんあります。けれど私は田舎が好きです。月に一度の子供会も私にとっては楽しいことです。仲よし会の年中行事も今年は何とか軌道にのりましょう。…現実ばなれのしない、足の地についた永続性のある方法をと、それにやっぱり新しいものをとり入れて古くさいものにしたくない。」(溝上 1958 p.189) (下線は増田)

自主的な活動の楽しさ。生活に根差し、永続性の追求。変化を恐れない。時代の変化に柔軟に対応することで、参加者に満足してもらい、あわよくば参加者を増やしていく。

「…もっと形のつながりをと考えています。作文グループも、私がおもい立って、文章つくってもって行っても、他には誰ももって来ておらない始末。やりましようかと誓って別れても、いざとなれば、仲々実行はむずかしい。これは余りにも現実追われている人々のためか、生活の惰性か、人をひっぱってゆくということは、ほんとうにむずかしいことと、時々なげだしたくなります。」(溝上 1958 p.215) (下線は増田)

農家の女性たちが多忙の中で、新しい行為を習慣化させることの困難と自主的な活動を継続させることのむずかしさがあった。

島根大学教育学部の一卒業生

「先日も婦人会があって、母は出席しました。午後はレクリエーションとして、映画や踊等があったそうですが、近所のおばさんは午前で帰ってこられました。そして、私の家へ聞こえるように、わざと大声で“午後は映画があるがみんこに(みないで)帰った”と、さも自分は遊ばずに早く帰ってきたことを自慢しておられました。祖母はきげんがよくありません。私はすぐ感づきました。母が映画を見て遊んでいるのが原因だと…私は夕方の炊事もできるだけして祖母のきげんをとっていました。そして、祖母にたまの映画ぐらいみなけりゃ、お母さんがおくれるなんて意見しました。/母が帰ってくると、祖母は“向うの嫁さんは早う帰られたが、ああでは、あとにのこったものは、みんないい気持でおれない。あげな風にすりゃ、レクリエーションなんて意味がなくなる”と喋ってくれました。もし、祖母が一人で夕方の炊事もしていたら、機嫌は悪いままだったろうと思いました。うちはこれですんだのですが、他の家のしゅうとめさんは悪口がこぼれたらしいです。初めは一つ一つこれらのことを考え、あるいはおどろいていましたが、そろそろ慢性になりそうです。」(溝上 1986 p.73) (/は改行) (下線は増田)

上記の資料からは、祖母・母・娘の関係性が読み取れる。娘が祖母の炊事を手伝うことで結果的に母の外出を支えているのである。農村の束縛を緩める役割を子どもが果たしていることが分かる。

高山ちせ女 「47歳の未亡人」

婦人会の余興

「わたしは手間をはぶいて、金をかけないで、ちょっと人を面白がらせて、そのなかに何かためになるものがある、しかもながくつづくような余興を考えねばならぬと思います。立派だなといわれるには金がかかるし、上手だったといわれるには手間がかかります。すると家庭で、毎日毎夜の練習に文句がでます。なんとかしてみんなが考えて、簡単に面白く教えのある余興をつくりだすとよいです。わたしちょっとやってみましょうか。

…わたしがお嫁になったならー / 一声・二調子 (嫁が姑によばれたとき、第一に「ハイ」と返事をし、第二に動作にうつれということ。) よくまもり / あの世のしゅうとをほめるより / この世のしゅうとにゃあほめられよう / わたしがしゅうとになったならー / わが身の過去をほこるより / 文化、与論に理解もち / 嫁の立場にゃ ともにたとう」(溝上 1986 pp.160-161) (/は改行) (下線は増田)

この女性は、面白さとためになることの両立、そして継続性が人々を集わせ続けるには欠かせないと指摘し、自ら実践例を提示している。

## 5. 結論

本研究が着目した農家女性たちのサークル活動には、学び/遊びの混合という特徴が見られた。どちらも文化活動でありながら、当該期の中等・高等教育の拡大により、「学び」は学校教育に取り込まれさらなる価値を付与され、逆に「遊び」は排除され貶められる傾向があった。サークル活動での手間がかからず、面白くてためになり、長続きするものの模索の中から、「学び」と「遊び」の両方を取り込んだ活動が採用され、人々を巻き込んでいった。女性たちの創意工夫の中から、地域で、家庭で子どもと共に学ぶことと遊ぶことの混合が見られた。サークル活動は農村生活の息抜きであり、人が集まる契機となり、ネットワークの形成・継続をもたらしていった。そこに、学歴をもたず(もてず)、都市への移動がままならなかった者(特に女性)たちが日々の暮らしの中で編み出した知恵を見ることができよう。

農村の女性たちは、家を変えなければサークルに参加できず、地域も変えられない。家を変えるにしろ、地域をかえるにしろ、子どもは何らかの重要な役割を果たしてきた。また、サークルで得たことが家庭を変える契機となっていた。サークル活動の運営からは、農村女性における、民衆が民衆を啓蒙する方法と実践の一端を見ることができよう。女子教育という女子(女性)を被教育者とみる視点のみならず、女性と子どもの関係性に着目し、女性を教育の実践者と見る視点から、「ジェンダーと教育」といわれる研究領域のすそ野を広げる視座がもたらされよう。

## 参考・引用文献

- 天野正子 1996 『「生活者」とはだれか—自律的市民像の系譜—』中央公論  
 天野正子 2005 『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館  
 家の光協会出版部編 1967 『喜びも悲しみも 主婦の生活記録』家の光協会  
 河北賢三「鶴見俊輔の思想・方法と大衆の思想」赤澤史朗ほか編 2014 『戦後知識人と民衆観』影書房 pp.331-367  
 北河賢三 2014 『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店  
 丸岡秀子編 1969 『村づくり二十年』理論社  
 増田仁 2014 『高度経済成長期における家事労働者形成過程の再検討』風間書房  
 M. セルトー (山田登世子訳) 1980=1987 『日常実践のポイエティック』国文社  
 溝上泰子 1958 『日本の底辺—山陰農村婦人の生活—』未来社  
 溝上泰子 1961 『生活者の思想』未来社  
 水溜真由美 2013 『「サークル村」と森崎和江』ナカニシヤ出版  
 内藤正中 1982 『島根県の百年』山川出版社西川祐子 2012 「サークル運動再考」安田常雄編 『社会を問う人々』岩波書店、pp.53-81  
 及川和浩 1963 『嫁と姑』未来社

- 鬼嶋淳「溝上泰子論」赤澤史朗ほか編 2014 『戦後知識人と民衆観』影書房 pp.19-56
- 大門正克 2012 「「生活」「いのち」「生存」をめぐる運動」安田常雄編 『社会を問う人々』岩波書店, pp.168-196
- 大金義昭 2005 『風のなかのエリア』ドメス出版
- 島根県連合婦人会他編 1983 『母たちの語りつぎたきことども』NHK サービスセンター
- 思想の科学研究会編 1976 『共同研究 集団』平凡社
- 全国農協婦人組織協議会 1965 『農村婦人の生活記録』

本研究は JSPS 科研費 JP16K02040 の助成を受けたものである。